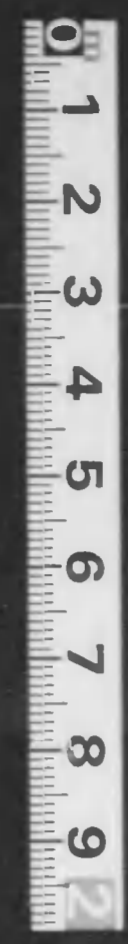


寫眞週報

編輯部情報閣内
ンセ十・號五廿第・日三月八

昭和十一年八月五日發行 印刷 同本報印刷部 第五五號



日獨學生の勤勞交驩





學生に與ふ

文部大臣 荒木貞夫



青年徒歩旅行

國民精神總動員

今次支那事變を以て、東亞の一局面に限られた聖戰であるといふが如き解釋が、國民の如何なる層にも、絕對にあつてはならぬ。實に、今次事變は、世界に、新たな歴史的創造をもたらし、重大な原因を含んで居り、日本自身も亦、事變の進展に沿つて、未だ曾て見ざる劇期的轉機を體驗しつつあることを、深く認識しなければならぬのである。

われわれは、國際的には、新たな秩序と平和を確立し、國內的には、國民の理想を今こそ顯現すべく、協力一致したはならぬ秋である。

抑々、學生生徒は、國家活力の源泉であり、國民の後進である。又、國家が、國際上に於ける價值は、實にその國風が列國の尊敬と信頼を得るや否やに懸り、一國の風格は、その國の未來を擔ふ學生生徒の徳操の如何に依る。この重大なる時局に當つて、國家が、その深遠なる力に期待する所、眞に大なるものがある所以である。

學生生徒は、烈々たる日本精神を通じて東西の文化を融合し、將來の皇國を擔ふ自らの誇りと新しき世界觀に生き、その本分とする處の學究に全力を傾注することに依つて、所謂知的動員に参加、ひいては文化國防の第一線に立たねばならぬ。

學生生徒は、その教養、能力、一般大衆よりはるか高い水準にある。いやしくも社會の指揮を受くることなく、寧ろ、その品位を高め、風尚を養ひ、學徒の面目を堅持、以て國民の範となり、よく時局に對處して青年日本の力強き存在を中外に顯揚されたい。

撮影 土門 拳



⇒ 山頂の護国神社前に勢揃ひして萬歳を三唱、防共の宣誓も高らかにしつかりと結び合ふ、七ヶ國代表。



⇒ 見よ、東海の空明けて、旭日高く輝けば、天地の正氣激刺と、希望は躍る、大八洲。

コ 世紀の感激をこめて、富士山頂に、振る、振る、防共國旗。今ぞ日本の、世界の夜明けは、嵐々と旗風に鳴る。

撮影 土門 拳





撮影 内閣情報部

勤勞交驪

日獨學生の



ヨーロッパと東亞に立つ新しい世界創造の推進力、日獨學生は、美と剛毅の日本を象徴する信濃高原で、力と汗の勤勞を通じ、堅く磨かれた知性の鉄を交へ、現在を拓き、未來を築かう！

高原の空高く響く「日独交驪」の歌、天和體操の気合も鋭く、日獨青年の腕は、清冽の體操を突く。東八ヶ岳の空は今仄々と明け初めて、おう、天地に躍動する、強き民族の青春！

朝の行軍がすむと、月見草の丘を越え、朝霧滴る森林を駆け、約一里の山野を跋涉、約一里の運材作業だ。世界を擔ふ若い肩は、落ちるやうな痛みをくぐつと耐へ、高鳴るヒットラー青年隊に足どりをつけて、岩道を、谷川を突進する。

日独兵舎の斷想

全隊にみまざる勤勞奉仕運動に呼應して、兵舎から、熱と力の道徳に飛び込んだ東京帝大生四十七名にとって、嚴格な規律に従ひ、一菜一水の糧食に甘んじ、六餐の原野に、無限の糧食をもち取るなどの生活はすべて、今までの人生に持つ得なかつた生活経験であつた。

軍を血豆だけにし、世紀の斷崖に身をまわらせた學生は、日本國に誇らぬか、それだけの生活から、何を学び、何を考へたであらうか。

一人の學生は、陽にけした顔を輝かせて言つた。「健康な生活様式は、肉體の勤勞を切り離して考へられません。又、或る學生は、進軍の馬車をかかへながら言つた。「一葉の野菜も、しみじみと感謝の念をもつて食ふやうになりまして、極めて、短時間の勤勞です、今までのつらさの、國民生活への理解に、大々クラスをしたと思ひます。」又、肩にめりこむやうな運材の辛い仕事を続ける學生は言つた。「一労働に、無意味な私運は、こゝに来るまで不安でしたが、勤勞は最終的に、青年に劣つてゐる。買物には時々同じ仕事が出来ないので、體力といふものに一つの自信を得ました。」それもこれも、勤勞奉仕共通の経験であり、阿れ、自分の生活経験を尊重して

した遊びを以て語るものであつた。しかもこれらの経験を具體的な糧として、歴史及び現實社會に對する公式的觀念の恩賜方法のものでは、不斷に活動しつつある歴史が、如何に固定化され、また生々しい現實が、如何に歪曲されたか、おぼろげながら再認識されたことは、青年日本の道に直に投六ヶ敷體であつたといはねばならない。

この時代に目撃した青年日本學生の生活に、七月十二日、夜の山道を越へ、日獨交驪學生四名が訪れて、更に大きな意義を加へた。

その夜、二つの日獨兵舎の暗い洋燈の下で、勤勞奉仕を中心に語り合ふ、力強いドイツ語と日本語が、何時までも戸

外に漏れ、時折、愛國行進曲の若々しい歌聲が、仄々と月見草の高原をわたたり、響き渡る樹林をゆるがすのであつた。

そして、翌朝から東に八ヶ岳、西にアルプスを望み、北に霧ヶ峰を仰ぐ高原に、青年ドイツ、青年日本のうふる力強い歌が、新たる天地を切り拓いていつたのである。

常に、新しき奮闘と逞しき氣をもつて、青年よ、ゆけ、世界の未來はすべて君らの手にある。





牧舎の山羊も、とうにお目ざめた。運材も終つて、朝飯前の休息時間、廣い草原に、みんな山羊を連れ出し、「可愛い山の友達」と遊ぶ。人なつこい仔山羊達は、もう、「ドイツ青年達ともなじんで、一メンバーと感ひする。



家畜小屋の屋根葺きも日課の一つだ。先づ作業の中で一番重要な仕事なので、はつと一息つける。家根の上で、八ヶ岳、アルプスの雄姿を眺め、徳高を眺めながら、藁をふいてみると、心は遠く、農業時代にかへつてゆく。

指導者達、向つて左から、丸山主事、竹越主事、堀長久保佐土美氏、大室主事。

食事がすめば、食器は自分で始末する。湯谷にこんこんと湧く泉で、こりこりと音も手なれた茶碗洗ひ。



朝飯は、味噌汁と薄焼、粗末だが、朝四時半から起きて駆け廻つた生徒は、二杯、三杯とお代りを要求する。清らかな空気が匂ふばかりの野天の食卓で、ピットラー・ユードントも負けずに、茶飯をかきこむ。





来てから何日も経つておないが
 百姓仕事はひと通い覚えた。開墾
 した土地に堆肥も、豆粕も入れた
 さあ、けふは種蒔きだ。畦道に整
 列して、一この種子に生命あれ一
 と農神に祈りを捧げ、種子の一つ
 一つに純情こめて黒土の上を降
 てゆく。



このキヤベツは、一般平地のキ
 ヤベツが無く、なつた頃、立派な玉
 菜になつて市場に出てゆく。山岳
 農業の希望をうす緑の葉に輝かせ
 すくすくと生ひ育つたキヤベツ
 この清らかなも、若々しい姿こそ
 日獨青少年の、美しい象徴だ。



雄大な風景が、満を巻く八
 ケ岳山下、若人の息吹きは火
 と燃え、汗は汗は火をな
 らし、未墾の原野に挑む開拓
 の戦ひは此處彼處、壯烈に展
 開する。見る見るとり除けら
 れる大岩、草木の根、開墾
 は、一斑約十五人、半日で深
 さ二尺、幅八尺、長さ十七尺
 の割で進捗する。

未だ斧を入れなかつた處
 女林の繁明、丁々としたま
 するは、農徒が大自然にう
 ちこむ斧の音、銃の響き。
 この木を新日本文化のくさ
 びにと、日獨青年の手で、
 農場の電柱となる唐松の枝
 は拂はれてゆく。





修練農場の生活は、炊事から掃除まで、すべて学生の手で営まれる。炊事當番は毎食五六十人分の食事を備ふに大奮だ。生魚など勿論食へないし、一食一菜の菜は文字通り野菜である。それに甘いものも無いので、或日の晝に食べた、香飯のお秋が、實に實に美味かつたといふ。



九時、消燈喇叭が鳴る。高原の空高く、秋を思はせる星は冷々とまたいき、山も眠り、谷も眠る。日輪兵舎に、枕を並べて結ぶ日獨學生の夢路は、安らかに、明日へと辿る。

東大生労働奉仕宿所の印象記

☆労働奉仕運動の義務化

ウィルヘルム・リーツケ

東大生の労働奉仕宿所にお客として一日を過ごつたドイツの學生が、そこで見た日本の労働奉仕と、ドイツのそれとの、構構や組織の相異を比較考察してみるのは當然のことであらう。

日本では、労働奉仕が未だ各人の自由意志にまかされて居る。また、國民の一般性態にしか見られなけれども、ドイツでは學年前から青年に労働奉仕の義務が課せられてゐる。日本の労働奉仕は、義務化される以前のドイツのそれに類似した性質をもつてゐる。ドイツで學生の労働奉仕宿所があつたが、それは大抵、個人的な創意に基き、或る特殊な目的のために組織されたものであつた。即ち、その労働奉仕について不幸な人々の助けを求めたり、或は公共の利益の爲に労働に従事するといふのがその趣旨であつた。

しかし、からした初期の労働奉仕は、その根本的精神として明瞭ならざるもあつたが、民族意識の確立と共に、はじめて労働奉仕の運動に



朝飯後の一時、白神の卓子によつて盛り合ふ二人。ドイツ語と日本語の隔りも一つの理解となつて静かな感傷に渾然と溶けてゆく。熊がいたか、花瓶代りの湯呑には、せんでいかに、はたらくくろ、いぶきのじやこうさう等の高原の花が、優しくゆれてゐる。

も、確固とした内容と形式をもつやうになつたのである。

日本の労働奉仕運動はドイツにくらべると、その中核となるべき根本思想を最初から與へられてゐるといふ點で、ドイツよりも、好都合な條件に置かれてゐる。ドイツの労働奉仕運動は、思想的、形式的、及び組織的に現在の形を確立する迄には非常な努力を要はねばならなかつたけれども、日本では既に大昔から、既とした道徳精神があつた。それは例へば、あの歐羅巴朝禮に見ることが出来る。歐羅巴人のわれわれにも十分その何たるか理解出来るものである。

たゞ、この思想に適應する形式と實際的な組織とを見出だせばよいのである。

まづ組織に就いて、三つのついたことを述べてみよう。

日本に於ける労働奉仕の義務化が急遽に確立さるべきではないか、自由意志に委ねられた労働奉仕といふものはつねにある程度の組織的な設備が要するものである。といふのは、さうした労働奉仕運動には、國家的動員を通じて一つの困難を伴ふからである。(中略)

ドイツの労働奉仕運動には固有のもので、日本のそれは、未だ確立されてゐない一つの傾向がある。それは、ドイツでは、労働奉仕に、労働者から優秀な若者階級の人々まで、凡ゆる階級のものも参加するが、日本では未だ行はれてゐない。然し、それは、労働奉仕が義務化されることに依つて實現されることであらう。

日本で、ドイツに於ける、義務化の形式を模倣してゐない點が、自分には奇異に思はれてゐる。労働奉仕が、青年の教育に大きな役割を演じてゐる限りに於て、自分は斯うしたことは正しいと批判することが出来ない。

自分が東大の學生労働奉仕で感じたものは、非常に愉快なものであつた。其處では、ちもとけた親友同志と言つた気分が充ちてゐて、命令されることも、叱責されることもなしに、何もかも整理

日輪兵舎の夜、晝間一里餘りの山道を下つて買ひもとめた、チョコレートや饅頭を袋のまま食べて、ドイツ青年の簡素な歓迎會が開かれた。燈は暗いが、顔を見せて語り合ふうちに、共感が、胸を燃やし、隣人のやうな親しさがこみ上げてくるのであつた。

☆高度の組織を持つて

カール・ホフマイア

然と運んでゐるからである。然し、自分は、この労働奉仕が、一時的奉仕に終らざらんとを希望してやまない。

今度、六また八ヶ岳修練農場を訪問し得た我々は、其處で農場員、東大生から非常な好意を受けたと同時に、種々の興味ある印象を得ることが出来た。

私は、日本に於ける労働奉仕運動を組織化せんとする試みを、次の二點から要察したい。

一、労働奉仕運動は、青年を、バイオニア的精神及び道徳的精神を以て教育し、協同意識を高めること、その組織力を強化しなければならぬ。かゝる指導精神の強弱は、日本國民が、今や、支那大陸に衝突しつゝある、大規模の大使命を成功裡に遂行するには、絶對に要求されるべき基本的要素である。

二、労働奉仕の遂行途上において、非常時にある日本に於ては、青年、殊に學生がより積極的に國家に對する奉仕へ身を投出すなら、労働奉仕の意義は更に増大されるであらう。それは、恰も兵士が戦場を前進するために身を擲つて戦つてゐるのと同様、精神の結束を、青年學生にもたらすからであらう。又、所謂國民精神の鼓舞も斯うした方法に依つてこそ、はじめて、その實を擧げ得るのではなからうか。

斯くして、私は、從來家庭にのみ、村落に留れてゐた日本の傳統を完全に更新し得るものと信する。

然しなかに、學生のみの修練農場を組織することでは満足すべきではない。學生は、青年農民、青年労働者と共に、そして自分の家庭に在つても、家族と共に労働奉仕に従事するといふ處にまで、組織化されねばならない。かうなつてこそ、はじめて、我が八ヶ岳の修練農場で、やや重態に思つ



た、社會的内容へのより高い完成が成し遂げられるわけである。

更に、労働の他に、理論的研究(哲學的、政治的、社會的)も行ふことを望みたい。殊に、學生の他に種々な階級、層の人々がこの運動に参加する場合に於いては、

又、修練農場の生活を、もう少し生活感あるものとしてはどうか。現在の生活は、いささか因みに過ぎはしまいか。我々が見た朝の體操の他に午後や夜間、賑やかなスポーツ(例へば、ランニングとか、野球とか)を行ふことにはどうだろうか。

明確に参加して、私は非常に美しい印象をうけた。この運動こそ、西洋からその形式をとつた労働奉仕運動に異に日本の内容一を興へてゐるものであらう。

結論として、私は、現在の日本の労働奉仕運動は、將來急遽に發展すべき國民運動の中心となる將來性をもつた初期的なものと觀察する。そして私が八ヶ岳でうけたこの觀察が、確き將來に於て正しかつたといふことになれば、どんなに嬉しいことだらう。

...wollen im
...ung als richtig erweisen sollte.
Di. Karl Hofmeier

日本海の泳ぐ

保健康

保三會友學際國



日本を亞細亞の盟主と仰ぐインド、シヤム、アフガニスタン、フィリッピン、ジャバアその他の東洋諸國の留日學生達を、國際學友會が太平洋の荒波で奮闘奮闘な日本精神の下に勵治しやうと、外務省文化事業部の援助により靜岡縣三保の松原に今春來建設中だつたサンマー・ハウス（國際學友會三保保養寮）は眞に「アジアの家」として應々完成、七月廿日から約百名の男女留學生が、名譽富士を穿む風光明媚の地に、やかてアジア新世紀の力強い一翼たらんと烈々たる氣概を體得しつゝ心身の鍛練に勵んで居る。

しかもこのアジアの青年達は、暑中休暇の終る九月五日まで、日本語講義文化講座、水泳等の他に、渡邊館長指導の下に、千四百坪の敷地に、庭園、運動場等建設のためシャベルや鍬を握つて「勞働奉仕」を實行し、草壁下わが學友一致の國民精神總動員に參加してゐる。

午前十時、水泳開始だ。今日は富士が見えないなア。

白い砂をふんで監視艇を引つぱり出すインドやジャバアの青年たち。

攝影 木村伊兵衛



その昔、天女が舞ひおられたといふ青空の下に、チヨコレイト色の「アジア青年寮」は建設された。傳説は古く、青年はいつも新らしい。

日本の學生は事變下の暑中休暇に、勤勞奉仕を勵んでゐる。オレたちも負けてはをれぬ。暑い汗の中から庭園が、テニスコートが生れてゆく。

海のない國に生れた、といふ人達も中にはゐたのだが、もうすつかり日本の海はバラタイス。



青い松に潮風の鳴る木かげで、野外教授が始まる。黒板に書かれた日本語、東洋人相互の理解は先づ言語からと、先生の一言一々に耳すます生徒の一課。

おひるすぎ、附近漁師の子らの唄がきこえてくるくつろいだ娯楽室。高真右から、浴衣がけがジャヴァのオマル・ヤデイ君、中央シヤムのアルン・ランシリ君、黒シヤツが印度のチャンドラ・ゴータマ君。



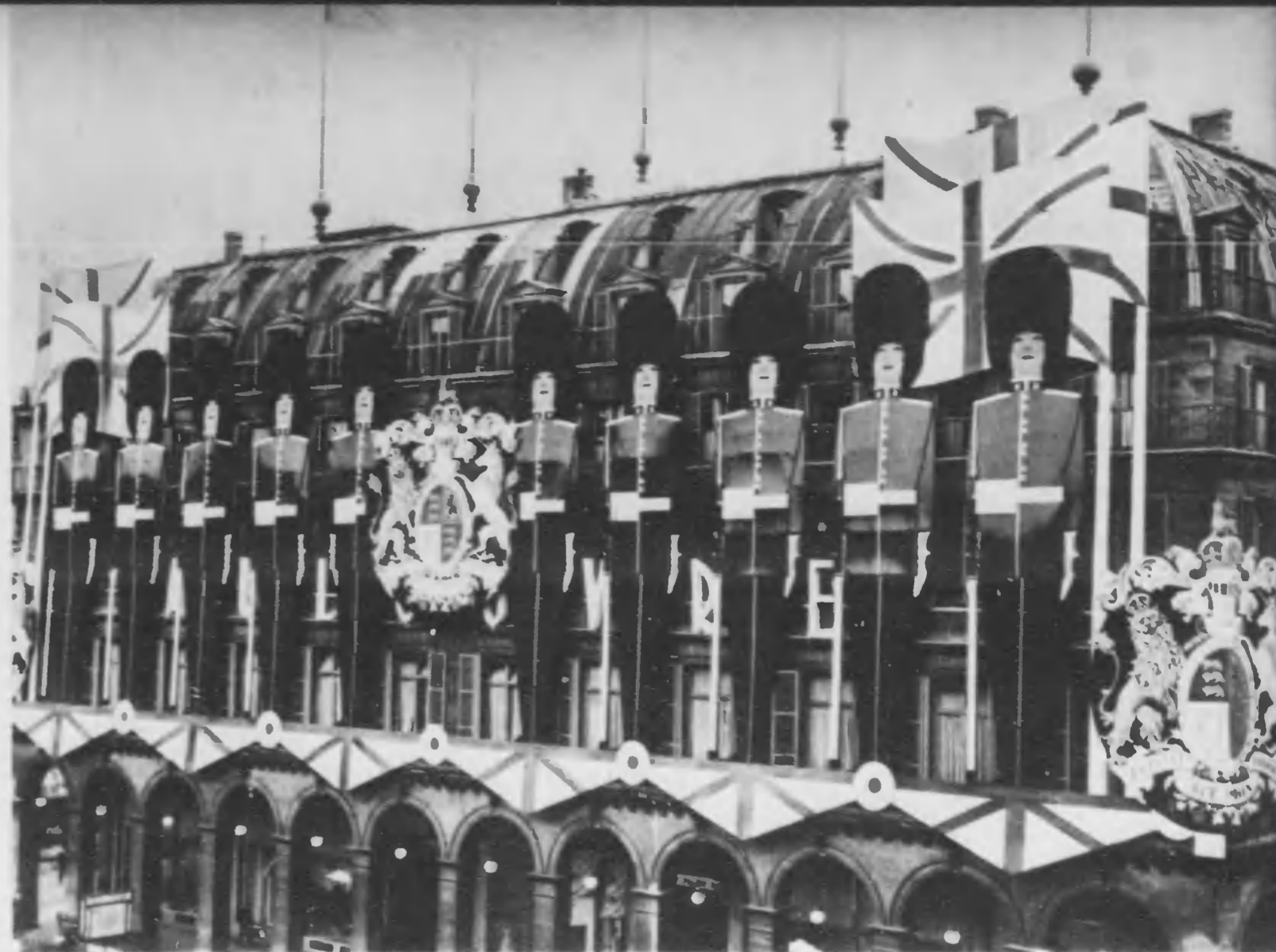
一エヘン、ダメだよ、わらつちや、と一生懸命村童に蹴球のコーチをしてゐるのは、子供たちの仲よし・人気者シヤムのカマレス・チャルアン君。

夕鐘雲の彼方に想ひうかべる故國の父母よ、私は日本の海で日本の浴衣とゾオリでもつて幸福に暮してゐます。自由時間を楽しむジャヴァと印度の若者たち。



四十八づいのベッドが階上と階下に並んであるギターの入れてあるスイツケイスの横で、日本の新聞に見入る、のびた瓜を切る……





英國皇帝御臨
間に熱狂する
パリ

英佛の提携を強
調すべく、英國皇
帝ジョージ六世及
びエリザベス皇后
は即位後はじめ
訪問の途につか
られ、七月十九日
パリに御到着、パ
リ市民の熱狂的歡
迎を受けさせられ
た。写真は目録き
百貨店に見られる
ウエルカム・デコ
レーション。

これは可愛ら
しい王さまと
王妃さまの
冠式

パリの子供の
國に、一年一度の
大行事である子供
祭りは、今年も全
國の小供たちの胸
を躍らせて賑やか
に行はれた。この
お祭りでは、王さま
と王妃さまの冠式
が、この光栄を
擔ふことになり、
二人の頭上に冠が
つけられた。



訪日日本青年團と會見
するゲーリング空相

交隣訪日中の日本青年團一行三十名は七月七
日ベルリンの宿舎を出發、日本へ來朝するヒット
ラー、ゲーリング代表とベルリン北郊で落ち合ひ
一緒にゲーリング空軍元帥を別荘に訪問した。之
に對し空相は朝比奈團長と懇ろな握手を交し
「よく來てくれた」と一同を激勵、感謝する團員
に歓迎の挨拶を述べた。



病院飛行機内
で手術

スワイスの片田舎
で軍病人が出來た
病院飛行機は今ま
では、患者輸送に
送られたが、この
場合はローザンヌ
の病院に運ぶま
で患者を放置し
ておいたのは生
命が危いと云ふ
ことで世界では
初めて、英海軍
裡に航空機内の手
術が行はれた。



海彼の方

米海軍に新
至極のカーチ
ス爆撃機

縦首上空を飛ぶ
米海軍の最新カー
チスSBC4型
スカウト爆撃機
従来のSBC3
型の二基型エン
ヂンの代りに一〇
〇馬力のシン
ル・ロウ・ライト
サイクロン・エン
ヂンをつけてゐる
優秀な軽爆撃機で
ある。



新發賣

従来のオートミールのやうに牛乳・砂糖を用意する必要なく、単に数分間煮沸するだけで美味しいオートミールが即席に出来るのが本品の特長です



即席オートミール

明治三ツオ

明治製菓株式会社

内閣情報部編輯

週報

■ 策のパンフレット



見本御希望の方は内閣印刷局宛御申出下さい



二等 東京市大智活



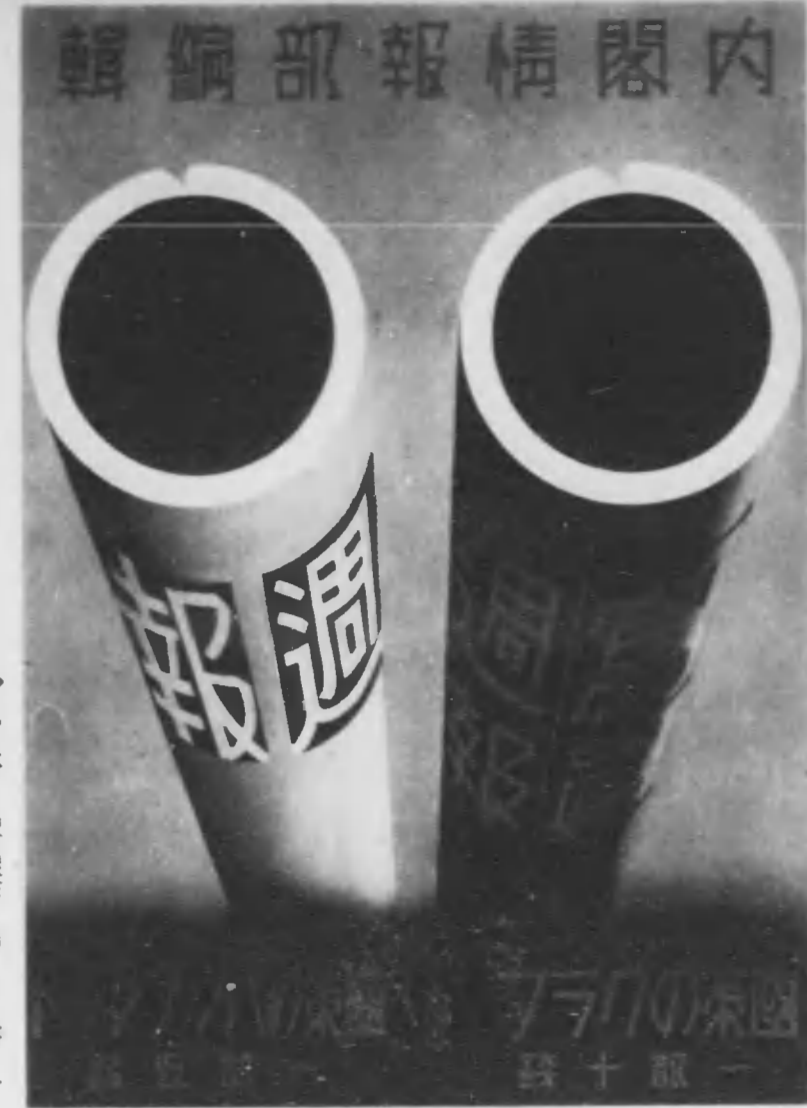
三等 東京市平田千代吉



佳作 大阪市岡井清蔵



佳作 岐阜縣加藤孝司

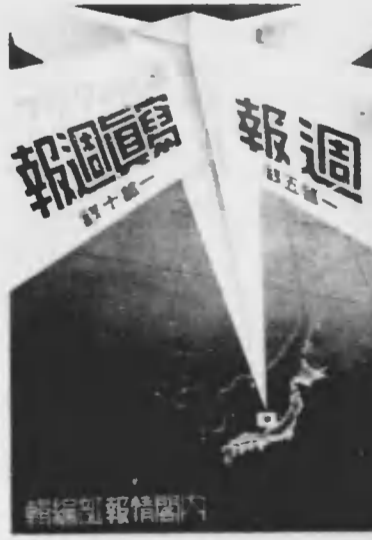


一等 名古屋市山口勝一

寫眞週報週報合同ボスター
圖案懸賞募集作品發表

★誠に本誌及び週報一が内閣情報部から姉妹誌として編輯、發行されてゐることを、普及徹底させるため兩誌合同のボスターを懸賞募集しましたところ、各方面より懸賞作品は陸續として殺到し、締切日である去る七月十五日迄に到着した数は無慮七二〇點の多數に達しました。之に對しては當部に於て慎重なる審査の結果當選を決定し、七月二十七日發行の寫眞週報、週報(同日發行)誌上に發表してありますが、更に當選作品並びに佳作の一部をここに掲げ、一般の御参考に資するとともに、懸賞者各位の御勞作に對し感謝の意を表する次第であります。

内閣情報部



佳作 兵庫縣 安保俱一

所 込 申	價 定	昭和三十八年八月三日印刷發行
寫眞週報配送部 東京市東區内幸町二二〇 電話四六六一五〇 郵政口振東京三五八〇〇	一 部 十 錢 一 年 (前金) 四圓八十錢 (送金不取) (外國郵便に依る場合は八圓九十錢)	發行所 内閣情報部 東京市東區永田町 内閣總理大臣官舎内 大日本印刷株式會社 東京市東區區市谷 加賀町一ノ二番地
全國各地官報販賣所 東部書籍株式會社 最寄書店・雜賣店 各地新聞販賣所 寫眞材料店	一ヶ年分未滿配送御希望の方は一部十錢の割合を以て前金を逐へ御申込み下さい	印刷局 東京市東區區市谷 加賀町一ノ二番地

寫眞週報(兼轉載)

八ヶ岳山麓に勤勞奉仕を續ける東大生。この夏休を汗に學び上に教へられる若き學徒。日輪兵舎の窓を開けば山の雲氣は月見草の香りに染つてしのび込む。

攝影 内閣情報部

写真週報 昭和十三年八月十三日 第三種郵便物認可 昭和十三年八月十三日発行 (毎週一冊水曜日発行) 第廿五號



ネオバンクロー

ネオクローム



輝く國産 いつも快調!

富士のフィルム

(本誌の大きさは固定規格A・「週報」倍)